

2.奄美分室の活動

藤井琢磨

奄美分室の施設・設備について

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室は、文化・社会・生物の多様な地域としてグローバルに発展する奄美群島での多様性維持機構の解明と保全のため、平成27年4月1日に奄美市名瀬地区に鹿児島大学奄美群島拠点の一つとして設置された。施設の整備にあたっては奄美市に多大なる支援を賜り、教職員が常駐する拠点オフィスは奄美市水道課庁舎の1室、実験室は奄美市名瀬公民館金久分館の1室、宿泊所は長浜教員住宅に3室が設けられた。拠点には、専任教員1名、および文部科学省特別経費「薩南諸島の生物多様性とその保全に関する教育研究拠点形成」プロジェクト（平成27年度はプロジェクト名末尾が形成、28年度以後は整備へと変わり、継続された。本報告では以後、合わせて概算プロジェクトと略称）によって雇用される特任助教1名とプロジェクト研究員1名、および事務補佐員1名が常駐し、各々の調査研究と並行して、各施設・設備の管理運営および社会教育活動、地域との交流促進を担ってきた。当センターは学内共同利用施設であり、宿舍や実験室、8人乗り公用車、インターネット接続や印刷可能なパソコン等のオフィス設備は学内教職員であれば申請を経て利用可能であり、奄美大島および加計呂麻島など周辺離島での研究教育拠点として活用されている。設立以後も、利用者らの意見を元に、設備の追加や規約・利用方法等の改善を繰り返し、研究教育活動の推進を図ってきた。

実験室およびオフィス拠点では後に冷凍庫やスキューバ潜水用タンクが導入され、主に生の標本を扱う自然科学分野の研究者らによって利用されている。また、実験室では温熱乾燥機や卓上遠心分離機、サーマルサイクラー、分光光度計など実験機器も順次導入されたことにより、幅広い調査研究に対応できる実験室となりつつある。しかし、実験室は大型冷凍庫等があるオフィス拠点と離れた距離にあること、多くても3,4名程度の利用を想定した広さであり大人数調査時の使用が難しいこと、隣室での一般の公民館利用者による騒音や振動によって作業に支障をきたす時もあること、換気や水道などが不十分な環境であることなど、研究施設としての課題も残されている。引越前前の拠点を利用して大人数による野外調査が行われた際には、奄美市水道課に作業場所としての会議室利用や野外調査器材の洗い場・干し場等の便宜を図っていただいた。奄美市水道課関係者の皆様には、この場を借りて、当センターによる研究教育への理解と多大なる協力に対する感謝の意を述べさせていただく。

長浜宿舍は、鹿児島大学に籍があるものであれば利用料免除のうえ利用することができる。ただし、寝具の維持管理のため、シーツの持参、あるいは分室所有のシーツ類を借りる必要がある。借用希望者にはクリーニング費用の負担をお願いしている。宿舍を含む分室関連施設・設備の管理運営については、特に発足当初は利用者による苦情も発生し、駐車場トラブルなど、一般入居者もいる集合住宅ならではの課題も発生してきた。その後、管理方法や利用者への適正利用を周知する手段の改善、老朽化した一部施設の改修などを経て、現在では調査や実習に利用しやすい施設となったと思われる。快適な居室としての維持は個々の利用

者のマナー・モラルに頼る部分が多い。今後も、利用者各位には退室前清掃の徹底など管理運営への協力をお願いしたい。

学校等教育機関との連携について

大学などの高等教育機関が無い奄美群島域において、県内国立大学の分室が設立されたということで社会教育的な地域貢献を期待する声も当初より多く寄せられている。地元高校との連携の例としては、平成 28 年 2 月に当センター海外客員研究員であったスティーブン・ロイル氏の来島に合わせて、大島高校にて高校生らと島の課題を話合う特別講義が開催された他、総合学習の時間を活用しての出前講義が不定期に行われてきた。また、後述する研究会など当分室での催しにも、生物部の活動としての参加が見られた。平成 31 年度には、奄美看護福祉専門学校看護科の一般教養「生物学」の講師も依頼を受け、学期を通じて担当した。地域教育機関との連携は、意欲のある担当教諭個人との交流による事例が多く、その方の島外への異動によって連携が途切れてしまいがちなことは、今後にもむけての大きな課題である。

研究会や講演会の開催について

島嶼研郡元キャンパスでは、分室設立以前より一般公開での研究会が開催されてきた。奄美分室では、インターネットを用いた相互通信を用いることによって、島にいながらにして当研究会を視聴し、質疑も行えるように中継会を開催してきた。さらに、島嶼研主催ないし共催のシンポジウムについても、同通信を活用して島と郡元キャンパスにて同時に視聴できるようになった。島在住者にとっては多様な講話を聞く機会が増え、話者にとっても普及効果の促進とともに、質疑を通じての情報フィードバックの機会が増えることになったと考えられる。

少しずつではあるが奄美大島において当分室の知名度があがり島在住者との交流機会も増えた結果、市民や地域行政からの相談や講演依頼も頂くようになった。例えば、平成 27 年度には、龍郷町芦徳および瀬戸内町請阿室集落自治会からの依頼をうけ、当地にて集落民向けの交流会を兼ねた講演会を行った。また、地元農家からの相談を受け、アマミノクロウサギによるカンキツ樹木食害の実態調査にも取り組んだ実例がある。電話あるいは直接訪問で受ける質問ないし相談の中には、学術的にも貴重な情報が隠れていることもある。上記のクロウサギに関する情報もだが、筆者に寄せられた情報から、国内分布未記録種のナマコが発見されたこともある。寄せられる相談の多くは、当然ながら、分室に常駐する 3 名の研究者の専門性では対応できない分野がほとんどである。そのような問合せに対し、概算プロジェクト参加者を中心とした多様な専門家を紹介するハブ的拠点となることは、数値的な成果としては示し難いものの、地域と大学をつなぐハブとして、当分室が担ってきた非常に重要な役割の一つであると考えられる。当センターに関係する研究者各位には、今後も島民の何気ない質問にもご対応いただければ離島拠点に常駐する一員として幸いである。

設立当初より島内外から寄せられる社会教育面での課題として、「“大学”あるいは“研究”と聞くだけで敷居が高く感じてしまう」「勤勉な人が、興味のある分野の時にだけ参加する」という事例が挙げられる。それに対する試みの一つとして、当分室では島嶼研勉強会「奄美分室で語りましょう」と銘うって、「お茶や菓子を片手に、気楽に学ぶ」というコンセプトの

会を不定期開催している。当会は、島で調査研究を行っている在野の学識者や、当分室を利用して調査を行っている研究者らに依頼し、話者の負担が少ないテーマ・形式・期日で開催している。令和1年11月現在で計27回を数え、毎度、10~20名程度の参加がある。依然として参加者の偏りが見られることは否めないが、当会をきっかけとして初めて分室に訪れる参加者も少なからず見られ、また、異なる組織・団体間の交流の場としても好評の声が寄せられている。当会以外にも、年1回ずつ開催される奄美市共催の子供むけイベント「奄美市まなびフェスタ」や「お仕事テーマパーク」にも、それぞれ平成28年度、平成29年度より出展し、分室が関連する研究・教育活動の写真や研究試料の展示、研究体験などを通じて小中学生むけの普及啓蒙活動も行ってきた。各地域メディアとの交流・連携も積極的に行ってきた。地元2紙による研究成果の報道やイベントの告知、ローカルラジオでの講義番組出演や訪問研究者の紹介など、各メディアには奄美分室の活動に対して多大なる支援をいただいていた。

来室者について、学外研究者の利用について

冒頭で述べた施設の利用や、上記の社会教育等に対する多大なる協力は多くの学内研究者を主たる対象としたものであるが、学外に籍をおく多分野にわたる共同研究者らによる調査研究も促進し、また少なからず分室の活動に対して協力を賜ってきた。計27回の「奄美分室で語りましょう」に話題提供してくださった延べ31名の方々のうち、実に23名が学外の方であった。また、2019年9月までの4年半に分室（オフィス拠点）来室者名簿に記入した（当センター教職員を除く）延べ1,571名の来室者のうち、257名が学外に籍をおく研究者であった。学内研究者の同行者として来室も多いが、単身での来島調査のついでに立ち寄ってくださる学外研究者も少なくない。リアルタイムでの調査地現況や調査協力候補者の紹介など、研究者常駐の離島拠点として一定の役割を果たしているのではないだろうか。ちなみに、来室者記録では、研究者・学生を除く一般来室者（あるいは所属先を記入しなかった来室者）は775名、学内研究者は169名、学内外の学生・院生は255名、中高生は115名となっている。特に学内研究者は来室者名簿への記入忘れによって過小に評価されている可能性があるが、いずれにせよ、学外研究者による訪問も一定数あることを示している。分室設置後、奄美大島にて学会大会も複数開催された（第27回日本熱帯生態学会、第70回日本寄生虫南日本支部大会・第67回日本衛生動物学会南日本支部大会合同大会、第13回日本刺胞有櫛動物研究談話会）。以上の記録からも、当分室が学内外の研究者による研究・教育活動を促進し、同時に研究者間や研究者—地域間等の人的ネットワーク構築に重要な役割を担ってきたことは明らかである。

筆者の専門分野である海洋生物多様性分野での例ではあるが、REIMERら（2019）は、琉球列島各域では研究拠点の有無がその地域における過去の生物多様性知見＝過去に記録されている生物種や研究報告の量に直接的に影響していると考察している。また同報告では、海洋生物多様性研究を行う組織が長らく無い、あるいは少なく、それに伴って海洋生物多様性基礎知見の不足が予想される地域としては、トカラ列島、大隅諸島、奄美諸島、宮古諸島が挙げられている。今後、当分室が継続的に拠点活動を続けることによって、奄美大島のみならず周辺地域に対して果たすだろう社会的・学術的役割の大きさは容易には計り知れない。

奄美分室の今後について

分室（オフィス拠点）は平成 31 年 4 月、名瀬柳町にあった奄美市水道課庁舎の老朽化に伴い、名瀬港町に位置する奄美群島大島紬会館の 6 階へと引っ越した。引越しにあたっては、奄美市および大島紬組合には多大なるご支援・ご配慮を頂いた。世界遺産の再申請など様々な変革を迎えつつある奄美大島、奄美群島域において、今後、当拠点が担う役割は多様に、そして大きな社会的意義を持つものとなるだろう。本年度末をもって区切りを迎える概算プロジェクトの後も、維持継続的に地域を支える教育・研究拠点として、また鹿児島大学を特色づける拠点の一つとしてさらなる存在感を示し続けられることを願って、以上、当分室の概算プロジェクトにおける報告とする。なお、当分室の過去の活動詳細については、半期に一度発行されているニュースレター「分室だより」に掲載されている。分室だよりの過去号の pdf ファイルは国際島嶼教育研究センターweb ページにて公開されているので、参照のこと（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 2019）。

引用文献

- REIMER J. D., BIONDI P., LAU Y. W., MASUCCI G. D., NGUYEN X. H., SANTOS M. E. A. and WEE H. B. 2019. Marine biodiversity research in the Ryukyu Islands, Japan: current status and trends. PeerJ: e6532, DOI: 10.7717/peerj.6532.
- 鹿児島大学国際島嶼教育研究センター 島嶼研分室だより . <http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/publications/toushokenbunshitsudayori/archivetbd.html>